

五月雨のアトリエより



五月雨のアトリエより

-梅雨入り-

しとしと、ぽつぽつ、ざあざあ、この世には雨を表す表現はたくさんある。私はそれら全てが嫌いだった。

ただ単純にうるさいからだろうか、急な夕立に服をずぶ濡れにされたあの日からだろうか、もしかしたらもっと…ずっと前からかも知れない。

ああ、雨の音があたりを満たす。確か梅雨に入ったところだったか？本当に耳障りだ…でも、どこか懐かしいようにも思「おはよう、目は覚めた？」

ほんの一瞬、雨の中で傘を開くかのように、この陰鬱な雨音の牢屋の中で異質な優しい声が響いた。

少しハスキーな可愛らしい声は心なしか上機嫌に私のそばに立っている。

声の主を探すべくあたりを見渡す。しかし、そこにはただ闇が広がるばかり。

空白を埋めるように雨の音が落ちてくる。

“誰？”「さあ？誰だろうね」

“…ここは？”「さあ？どこだろうね？」

問いかけに答えるつもりは無いという事なのだろうか？状況から推察するに良くて夢、悪くて誘拐…だが、一向に覚める気配も無ければこの状況への危機感すら感じられない。

それどころか胸中に浮かぶのは郷愁と既視感。

“もしかして、どこかで会った事ある？”「なにそれ、ナンパ？」

この気安い声の主は私に何一つとして情報を与える気がないようだ。

ため息混じりに視線を辺りにやる。初めは光一つないように見えたこの部屋だったが、彼女と話すうちに目が慣れてきたのか臙げに部屋の全貌を見渡すことができた。

そして目に入ったのは2つ、わずかに光の漏れだす扉とぽつんと床に置かれた古ぼけたパレットだ。

何もないこの部屋にパレット？そう思い私は手に取る、その途端…

《雨音が強く脳裏に響く、こんな雨が降り頻るある日、私は1人の少女と出会った。少女は口下手で、伝えたい思いを上手く言葉にする事が出来なかった。だから彼女は》

…待て、何の話だ。私は今何を考えていた？

「大丈夫？この部屋は暗いからね、外出よっか」

鈍い頭痛に意識が歪む私は、何を返すでも無く彼女の声に従った。

-他愛のない問-

少し錆びついた扉に手を掛け外に出る、そこは先ほどの部屋とは違いあたりを見渡すには十分な灯りの着いた廊下であったが、ここもどこにも窓はない。だと言うのにあたりから響く雨の音は外の憎たらしい悪天候を教えてくれる。

「そういえば××はさ、雨は好き？」

そう話しかけてくるのはあの暗闇の中の少女、淡い光に照らされその姿を表した彼女、ぱっちり大きな瞳はうっすら青く透き通るようで、その肌は白く、ふわりと揺れる黒髪や仕立ての良い黒いレースの着いたワンピースとのコントラストが目を引くようだ。

“…僕名前教えた？”

「ううん、聞いてないよ？」

彼女は悪びれる様子も無くニコニコと笑っている。

“…ストーカー？”

「違うよ、失礼だなあほんと」

「…」

「それで？雨は嫌い？」

本当に答えるつもりが無いようだ。この容姿ゆえに今私は恐れることが出来ずにいるが、状況のみに冷静に目を向ければかなり不味いのでは無いだろうか？だがまあ…

“まあ、雨は嫌いかな”

「ふうん、なんで？」

“なんでってそりゃ…濡れるし、うるさいし…何でだろ。大した理由は無いんじゃないかな”

「そっか、でも私は雨すきなんだ」

そう言って薄く微笑む彼女はどこか納得の言った、そして同時に悲しそうな顔をしてるように見えた。

“…なんで？”

「大切な人に出会えた日だから」

“そうなんだ”

どうしてだろう、次に彼女にかけるべき言葉が思い浮かばない。

大切な人ってどんな人？どんな出会だったの？簡単な質問はいくつか思い浮かぶ。だが、その全てが不適切で、もはや自分にはそんな事を言う資格は無いようにさえ思えて、私は彼女から目を逸らした。

今、彼女がどんな顔をしているかはわからない。雨音がやけに耳障りだ。  
私の目に今映るのはこの廊下に並んだ4つの扉。うち一つはさっき私達が出てきた扉だ。  
何も言えず、手近な部屋へと歩みを進める。

-誰かの部屋-

何故か黙って着いてくる彼女を尻目に私が出て来た部屋から1番近い部屋の扉を開く、そこは女の子の部屋のように可愛らしい装飾が施されている。

“…ここは君の部屋？”

「さあ、どうだと思う？」

“わかった、聞かないよ。”

「ごめんね？」

“あ、そう言えば。僕の名前知ってるんだったら君の名前は？それもさあどうだろ？”

「さあ、どうだろ？」

“…”

「ごめんごめん…そうだなあ。なら××が今つけてよ」

“名前…ならジェーンで”

「…知ってるよ？それ名無しの権兵衛とかと同じでしょ」

なぜかスネた顔で背中をぐりぐりとしてくる彼女に懐かしさを覚える。

“さっちゃん”

「…え？」

“さあ？ってよく言うからさっちゃん。どうかな？”

「良いと思う。すごく良いと思う」

なぜか上機嫌になった彼女な背中を押され部屋へと入る。

女の子の部屋を漁ると言うのは気が引けるが状況が状況だから仕方がない。

ふと使い込まれた机の引き出しを開く。そこに見つかったのはずいぶんと古くなった日記。

“読んでも良いかな？”

「…何で私に聞くの？良いんじゃない？」

“目が泳いでるよ、さっちゃん”

くすりと笑いページを開く。

なんて事ない少女の日記のようだ。しかし、少しずつ上手くなっていく落書きと共に綴られるその日々には全て、私がある。

私と学校に行った、私と話した、私と遊んだ、私と喧嘩した、私と約束を交わした。そんな最後の一文はこうだ「××の絵を描く約束をした！上手く描けるといいなあ」

待て、何の話だ？こんな覚えは無い、そんなはずが無い、でも、私はこの日々を否定しきることが出来ない。

震える指で最後の日付をなぞる。私は知っている、三月十三日の中学校の卒業式の日…彼女はこの日命を落とした。

違う、そんな事は知らない。何の話をしている？日記に目をさらに滑らせる、日記の持ち主…あの子の名前は「大丈夫？」

後ろから伸びた細い腕が日記をパタリと閉じる。

“…大丈夫”

いつのまにかその数を増していた浅い呼吸に気がついた私は、彼女の声に掬い上げられるように平静を取り戻した。

“ごめん、ありがとう”

「ううん。私こそごめん」

彼女がなぜ謝るのだろうか、読む事を許したから？…いや、彼女はきっと何か罪を犯した。それはきっと取り返しのつかない事…それでも

“良いよ、許す”

「…そう。ほら、出たいんでしょ？続き探しなよ」

探す、確かに彼女は探すと言った。私が何かを探しているのは紛れもない事実だ。しかし、私は今何を探しているのだろうか？状況から推察するに出口…だがどうもしっくりこない。

しばらく当たりを見ていると、タンスが目止まる。

可愛い装飾のわりに用途は雑多で、上部には服が、下部にはおもちゃや学校で使う道具などがとりあえず押し込まれていた。

その中に一つ、古ぼけた絵の具セットがあった。なんの気もなく拾い上げる…

《雨音が脳裏に響く。私は彼女と約束を交わした。何も荒唐無稽で壮大な話ではない。叶えられない夢物語ではない。日常の中にありふれた、少し微笑ましい何気のない約束だ。

だがそれが叶う事はずなかつた。なぜなら彼女は…》

だからなんの話だ。目を瞑る、記憶を辿る、遡る、しかし、名も知らぬ彼女の記憶は無い。

ならばこれは夢だ。雨音が酷く耳障りで仕方がない。

「大丈夫？」

“…何が？”

「辛そうだったから」

“なんでもない”

胸中の疑問を、耳にまとわりつく雨音を振り払うように踵を返し部屋を出る。次だ、部屋はあと二つ。全てを見れば私は答えに辿り着く。その確信が…私の足を鈍らせる。

“君は誰？”

「…さあ、誰だろう」

それでも、歩みを進めるしかないのだろう。

-過去の自室-

扉を開く。いよいよ夢だという仮説が現実味を帯びてきた。ここは、昔の私の部屋だ。確か、高校生になる前あたりまではこんな感じだったか。

“…”

「あ、部屋見ても大丈夫？」

“なんで僕に聞くの？”

「ふふ、目泳いでるよ」

意地の悪い事だ。ああでもこの感覚は悪く無い。この部屋で、こうして他愛のない軽口を叩き合う。どこか懐かしいように思えてふと笑みが溢れる。だが、その穏やかな気持ちはベッドに無造作に転がる、ひしゃげたストラップに掻き消された。

見覚えは無い。だが、この部屋にあって見覚えが無いと言う事実こそが、私の記憶の欠落の証左であるように思えてならなかった。

目を、意識を逸らすかのように机に目を向ける。

私はそう真面目な人間でも無かったゆえ、あまり使う事はなかった。ただなんの意地かわからないが、整理整頓だけは心がけていたものだ。机上にはゴミが溜まらないようこまめに掃除をしたし、教科書の雪崩を防ぐべく仕切りも自分で用意した、ましてや引き出しが開きかけになるほど何かを詰め込むような事は無かった。

…つまり、この引き出しを膨らませている物は一体何か、ささやかな現実逃避を終えずると嫌な音を立てながら引き出しをこじ開ける。

そこにあったのは引き出しにきっちり詰まった古ぼけたキャンバスだ。

手に取ればどうなるか、それはもうわかりきっていたが、私は手を伸ばした…

《雨音が微かに脳裏に響く。私はあの日立ち尽くしていた。  
足元に転がったひしゃげ切ったストラップを握りしめ、シトシトと雨が降り頻る中ただ何もできずに空を眺めていた。ああ、目の前には…》

「本当に大丈夫？」

肩にしっかりと感じる両手の感触と、やけに斜めに歪んだ視界から、私は今倒れそうになっていた事を理解した。

「少し休んだら？」

“…そうする”

何せここは私の部屋だ、ベッドもある事だし、寝転んでしまっても構わないだろう。

「あのさ、大事な人はできた？」

“なんの話？”

「ただの雑談。今大事な人はいる？」

“どうなんだろ”

どうも話が見えて来ない。雑談の話題にしては妙なものだ。だが、彼女の表情は、笑顔を浮かべてこそいるがどこか真剣で、適当に流そうとは思えなかった。

“多分、君の言うような大事な人はいない。兄弟は居ないけど、親とは仲は良い。学校に行けばいつもつるんでる人もいるし、話す人も…多くは無いけど、いる。でも、大事な人って言われると答えられない”

「…そっか。やーいぼっち」

“嬉しそうだね”

「別に」

そうだ。答えられない。居ないわけじゃ無いんだ。でも、私は、僕は、答えられなかった。ああいや、しっくり来るのはこちらだな。さあ、誰なんだろうね。

もう良い加減雨の音にも耐えられない、そろそろ次の部屋へ行こう。

「もう行く？」

“うん”

次だ、部屋は次が最後。全てを見れば私は答えに辿り着く。その確信が…今度こそ私の背中を押した。

“さっちゃん。雨は好き？”

「うん、好きだよ」

きっと私はもう全て気付いているんだ、私は部屋を後にした。

-五月雨のアトリエ-

部屋に向かう、雨音の響くこの廊下で、一つ、足音が加速する。

さっきまでは私の後ろをついて来ていた彼女が、私の前を歩いて行く。

扉が開く。

そこは懐かしい、私達の母校の美術室であった。

彼女はゆっくりと、しかし確かな足取りで奥へと進む。

ふと、床に落ちている使い込まれた筆を拾い上げ、私に手渡した…

《ああ、私はなぜ今まで忘れていた？目の前の少女こそが、私が雨が嫌いになった原因であり私の大事な、しかし今は亡き幼馴染、天風五月(あまなぎさつき)であった。

私は昔、彼女と過ごしてきた。彼女の人生に私のいないページはなく、私の人生に彼女のいないページは無いはずだった。しかし五月雨の降りしきるあの日、交わした些細な約束を果たすこともできず、彼女はこの雨に消えたのだ。…いなくなってしまうはずだった》

視線を前に移す

「さて、私は誰でしょう」

“さっちゃん”

「ふふ、たまたま言い当ててくるんだもん。びっくりしたよ」

“なんで？”

「どのなんで？私が今ここにいる理由？私の事を忘れてた理由？」

“全部”

「あはは、余裕無いなあ」

“教えて”

「…ごめん。私はもういない、死んじゃった。だからここにいる私は幽霊かなにかだね」

“そう”

「うん、それで私の事忘れてた理由だね。…私も詳しくは知らないんだけどさ、古いおまじないにこんなのがあったんだ。大事な人の、自分との思い出を全部使って一回だけ死んだ後も会えるって」

“勝手に使ったの？”

「…ごめん」

“さっちゃん、昔からそうだよ。僕が置いてたお菓子はだいたい勝手に食べるしさ、ゲームのデータも勝手に進めるし…”

「ごめん」

ああ、本当に昔からずっとこうだ。彼女は何も考えず好き放題。でも、そんな彼女を見えるのが私は好きだった。だから答えはずっと決まっていた。

“いいよ、許す”

「…ありがとう。でも、最後くらいちゃんとしようと思ってさ」

「あの日果たせなかった約束の続き、今度こそ××の絵を描かせて」

“何年越しなんだろうね、いいよ”

彼女はゆっくりと使い古した筆を手に取り、古ぼけた絵の具セットを開き、古ぼけたキャンバスを立て掛けた。

乱雑に腰掛けた私を見やると薄く笑い、静かに筆を走らせる。

静かな部屋に筆の音と雨音だけが響くしとしとと、ぽつぽつと、ざあざあと、そう言えば梅雨ももう時期終わりだと言うのに今日は一段と雨脚が強いらしい。

永遠に思えるほど長く、瞬きの間のように短い時間の後、彼女は一息つくると立ち上がりキャンバスを手渡す。

「ありがとう××。××はこの雨が嫌いかもしれないけど、私は雨好きなんだ。じゃあ、元気でね」

私はこの時なんと言ったか、もはや思い出せやしないが、堪えきれない涙をそれでも堪えてふわりと笑う彼女を最後に、意識は雨へと溶けて行った。

-梅雨の終わりへ-

自室のベッドで目を覚ます。

私の頬をまた何かが伝う、シトシトと雨の音が窓から響く。もうじき梅雨も終わるだろう。

部屋の片隅には雨か何かで滲んだ古い絵があった。モデルはどうやら私らしい。

これがなんなのか私はついぞわかることは無かったが、大切なものだという事だけは痛いほどわかる。

ふと、何かが私にこう問いかけた。

「雨は好き？」

その問いに私は…